View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE



【注釈】

# 『古本説話集 全注釈』大齋院事（おほさいゐんのこと）（第一）

## 其の三（九丁ウ1～十一丁オ7）

# *Kohonsetsuwashu Zenchushaku Oosaiinnokoto* : III

椎葉 富美
安倍 素子
川浪 玲子
中村 文子
福田 益和
山口 康子

Fumi SHIIBA
Motoko ABE
Reiko KAWANAMI
Fumiko NAKAMURA
Yoshikazu FUKUDA
Yasuko YAMAGUCHI

（1）

## 要約

『古本説話集』は、編者未詳。成立は平安末期から鎌倉初期と言われている古写本である。唯一の伝本である旧梅澤記念館蔵鎌倉中期写本（現東京国立博物館蔵）には、題簽も内題もないため、本来の書名も不明であり、一般に『古本説話集』と呼ばれている。

流麗な平仮名文で、大斎院選子内親王の話に始まり、関寺の牛仏の話で終わる。王朝文学の著名人を中心に樵夫や貧女の話に至るまで有名無名人の逸話や観音霊験譚などが収められている。『今昔物語集』以下の諸説話集との共通説話も多いが、書承関係は明らかになっていない。

本稿は、二〇一六年から始めた『古本説話集』の注釈「大斎院事（第一）」の「其の三」として、先稿に引き続き、九丁ウ1から十一丁オ7までの注釈を試みるものである。

「本文」は、原文に復元できることを目指す一方、読みやすさも考慮し、比較の便のため、「対照説話」を本文の下段に記した。「口語訳」は、平易かつ明確な現代文を用い、原文の雰囲気が伝わることも意識した。「語釈・語法」は「注釈」の根拠を示し、特に語学的視点を多く取り入れるように心がけた。さらに「補説」として、「注釈」における重点箇所を特記した。


キーワード　古本説話集・大斎院・極楽

（二）

## 解題

『古本説話集』（以下、「本集」と略称）は、昭和二十四年「新指定国宝展」で世に知られた。翌年、梅澤彦太郎氏の所有に帰し、以来、題簽も内題もないため『梅澤本古本説話集』と称されることが多い。梅澤記念館・文化庁旧蔵、現在は東京国立博物館所蔵である。

本書の書誌等については、『梅澤本 古本説話集』（貴重古典籍刊行会編、貴重古典籍刊行会発行・一九五五年）の田山方南氏の解説、および『梅澤本 古本説話集』（古典資料類従六・勉誠社・一九七八年）の川口久雄氏の解説に詳しい。墨付全部一三六丁。奥書識語はなく、冒頭二丁オ～四丁オ、および六〇丁ウ～六一丁ウに、目録（漢字表記の説話表題を本文の説話配列に従って列記したもの）がある。全七十話が、前半四十六話、後半二十四話に二分され、一般に前半を上巻、後半を下巻と称されている。

本書の説話は、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』と共通のものが多い上、『世継物語』『打聞集』などの小説話集との重なりも多く、類縁性や前後関係が論じられてきた。しかし現在のところ、諸説話集の伝本の一つ、あるいは異本・抄本とは考えにくく、また、どの説話集とも相互の承接関係は証明されず、それらの諸説話集との共通祖本が想定されている。現在のところ、天下の孤本とみるべきである。

成立年代、著者（編者もしくは筆録者）、成立事情等は不明であるが、『古本説話集総索引』（山内洋一郎編・風間書房・一九六九年）の刊行以来、日本語史的な観点からの研究も進められている。鎌倉中期筆写と思われる貴重な古写本である。

## 凡例

### 一　表題

本集には、説話表題（説話本文の前に記載された表題）は見られないので、目録表題をそれぞれの該当説話本文の前に掲げ、訓読を振り仮名の形で示す。その根拠については、各説話の口語訳の次に、項目を立てて述べる。また、川口久雄校訂『梅澤本 古本説話集』（岩波文庫・一九五五年）以下の研究書にならい、説話の話番号を（　）をつけて付し、（第一）（第二）の形で示す。

### 二　本文

1　底本は、東京国立博物館所蔵（梅澤記念館・文化庁旧蔵）『古本説話集』を用いた。『梅澤本 古本説話集』（田山方南解説・貴重古典籍刊行会編・貴重古典籍刊行会発行・一九五五年）、『勉誠社文庫124 古本説話集』（川口久雄解説・勉誠社・一九八五年）、「e國寶 国立博物館所蔵 国宝・重要文化財」（http//www.emuseum.jp/top?d_lang=ja）を参照する。

2　底本の一丁を二頁として、表をオ・裏をウと表記し、行数を本文の上に算用数字で記す。なお、勉誠社文庫の頁数を（　）で示す。

3　原文の漢字はそのまま漢字で表記し、原文に近い字体を選ぶ。

4　訓みをつけるときは、歴史的仮名遣いを用い（　）で囲む。

例　大齋院（おほさいゐん）・給（たまひ）て

5　反転記号・繰り返し記号・見せ消ち等は原文どおり表記し、必要に応じて注をつけるか、「語釈・語法」の項で説明する。

6　本文の仮名表記を、漢字表記にするときは、振り仮名として原文の仮名をつけた。表記する漢字は、現行の漢字とする。

例　大殿（おほとの）・齋院（さい）なを（ほ）

7　仮名違いは、右側に正用を【　】で示す。

例

8　必要に応じて句読点・濁点・引用符をつけ、会話文には「　」をつける。

9　一語が二行にまたがる場合は、どちらかの行にまとめる。

例　九丁オ7～8　物語（ものがたり）

### 三　対照説話

対照すべき説話を、本集本文の行切りに合わせて記載する。テキストは、「新日本古典文学大系」など、一般的なものを選ぶ。

### 四　口語訳

逐語訳を心がけ、必要に応じて適宜主語等を（　）で補う。

### 五　語釈・語法

丁の表（オ）・裏（ウ）ごとに、該当箇所の行数を算用数字で示し、特に語学的視点を取り入れるよう心がける。

### 六　補説

特に詳述する必要のある問題についての考察を記す。

### 七　類話

紙幅の都合上、各話の末尾につける予定である。

### 八　参照テキスト

略号とテキストは次のとおりである。

岩波文『梅澤本古本説話集』川口久雄校訂・岩波文庫・一九五五年
全　書『古本説話集』日本古典全書・川口久雄校註・朝日新聞社・一九六七年
総索引『古本説話集総索引』山内洋一郎編・風間書房・一九六九年
全註解『古本説話集全註解』高橋貢・有精堂・一九八五年
新大系『古本説話集』新日本古典文学大系42・『宇治拾遺物語』と併録・中村義雄、小内一明校注・岩波書店・一九九〇年
全訳注『古本説話集 上下』高橋貢全訳注・講談社学術文庫・二〇〇一年

### 九　参考文献

参考にした文献については、できる限り該当部分に書き入れる。記載できなかったものは、各話の末尾につける予定である。

大齋院事（第一）其の三（九丁ウ1～十一丁オ7）

【九丁ウ】（二二頁）

殿上人、女房起きたらむとも知らぬに、
かく居たれば、思ひかけずおぼゆ。女房は夜
より物語して、月の明かゝりければ、「居明か
さむ」と思ひて居たるに、かく思ひかけぬ
人のまいりたれば、いみじくあはれに思ひたる。
気色ばかり奥の方に、碁石笥に碁石を入るゝ
音す。御前にも、昔おぼしめし出でゝ、あはれにお
ぼしけむかし。昔の殿上人は、常にまいり
つゝをかしき遊びなど箏・琵琶も常に弾きける
を、いまはさやうの事する人もなければ、ま

【十丁オ】（二三頁）

いる人もなし。たま〳〵まいれど、さやうの事
する人もなきを、くちをしくおぼしめされけ
るに、今宵の月の明かければ、むかしおぼし
出でられて、ものあはれによろづながめさせ給て、
御物語などして御とのごもらざりけるに、
夜いたう更けにたれば、物語しつる人〳〵も、
御前にやがてうたゝねに寝にけり。わが御目は覚め
させ給たりければ、御箏を手すさみに調めさせ
給たりけるほどに、かく人〳〵まいりたれば、昔
おぼえてなむ、あはれにおぼしめしける。「この

【十丁ウ】（二四頁）

人〳〵は、かやうのわざすこしす」ときこしめしたる
にやあらん、御箏・琵琶など出させ給へれば、わざとに

『今昔物語集』巻第十九村上天皇御子大斉院出家語第十七

（新日本古典文学大系36・一九九四年・岩波書店・底本…東大本甲）

殿上人モ、此ノ女房有ラムトモ不知ヌニ
女房居タレバ、思ヒモ不懸ズ思ユ。女房二人許□
ヨリ物語シテ、月ノ明カリケレバ、「居明
サム」ト思テ居タリケルニ、此ノ思ヒモ不懸ズ
人ゝノ参タレバ、極ジク哀レニ思ヒタル
気色有リ。
院モ聞シ食シテ、昔シ思シ食シ出テ、哀レニ
思シ食シケムカシ。昔ノ殿上人ハ常ニ参
テ可笑キ御遊ナドモ常ニ有ケレバ、御箏・御琵琶ナド常ニ弾ナドシツ、遊ケルニ、
今ハ絶テ然ル事モ無ケレバ、参
ル人モ無シ。適ニ参ルト云ヘドモ、如然ノ遊ビ
スル人モ無キヲ口惜シク思食ケ
ルニ、今夜ハ月ノ明ケレバ、昔ヲ思シ食シ
出テ、哀ニ思シ食シテ、
御物語ナドセサセ給テ御不寝ザリケルニ、
夜ノ痛ク深更ヌレバ、物語申ス人共モ
御前ニウタ、寝ニケリ。院ハ御目ノ醒
サセ給ヘリケレバ、御箏ヲ手扣ニ遊バシ
ケル程ニ、此ク人ゝノ参タリケレバ、昔
メキテ哀レニナム思シ食シケル。「此ノ参タル
人ゝハ此様ノ事少シ許為ナリ」ト聞シ食ケル
ニヤ、御簾ノ内ヨリ御箏・琵琶ナド出サセ給ヘリケレバ、態トハ

（四）

3 はなくて、調め合はせつゝ、もの一二つばかり
4 づゝ弾きて、夜、明け方になりぬれば、内裏へ帰ま
5 いりぬ。殿上にて、あはれにやさしくおもしろかり
6 つるよしを語れば、まいらぬ人はいみじく
7 くちをしがりけり。さて、その年の冬、をりさせ
8 給て、室町なる所におはしまして、三井寺
9 にて尼にならせ給にける後は、ひとへに
10 御をこなひをせさせ給つゝ、終はりいみじくめで

【十一丁オ】（二五頁）

1 たく尊くてなむ、失せさせ給にける。「『この世
2 は、めでたく心にくゝ、優にて過ぎさせ給へるに、
3 後の世いかゝ』と思ひまいらせしに、ひたぶるに
4 御行ひたゆみなくせさせ給ひて、御有様
5 あらはに、極楽疑ひなく、めでたくて失せさせ
6 給ひしかば、『一定　極楽へ参らせ給ぬらん』
7 となむ、入道の中将よろこび給し」と、語り給し。

無ケレドモ弾合セテ、楽一ツ二ツ許
弾ク程ニ、夜モ明ケ方ニ成レバ、内ニ返リ
参ヌ。殿上ニシテ哀レニ面白カリ
ツル由ヲ語ケレバ、不参ヌ人ゝハ
口惜キ事ニナム思ケル。其ノ後、其ノ年十一月ニ忍テ斉院ヲ出サセ
給テ、□ト室町ト云所ニ御マシテ、其ヨリ三井寺ノ慶祚阿闍梨ノ房ニ
御マシテ、御髪ヲ下シテ、尼ト成セ給ニケリ。其ノ後ハ道心ヲ発シテ、偏ニ
弥陀ノ念仏ヲ唱ヘテ、終リ極テ
貴クシテナム失サセ給ヒニケリ。「現世
ニ微妙ク可咲シクシテ過サセ給ヒニシカバ、
後生ハ罪深クヤ御シマサムズラム」ト人皆思ヒケルニ、
御行ヒ緩ム事無ク貴クシテ、
「現ニ極楽ニ
往生シ給ヒヌラム」
トテ、入道ノ中将モ最後ニ参リ会テ、見テ喜ビ被貴ケルトナム語リ伝ヘルトヤ。

## 口語訳

殿上人は、女房が起きているだろうとも思わなかったが、このように座っていたので、思いのほかに感じる。女房は夜から（一晩中）話をしていて、月が明るかったので、「寝ないで夜を明かそう」と思って座っていたところ、このように思いがけない人が参上したので、たいそう趣深く思った。ほんのすこしだけ奥の方で、碁笥に碁石を入れる音がする。大斎院も昔を思い出しなさって、しみじみとした思いをされていたのであろうよ。昔の殿上人は、（斎院の御所に）常に参上しては趣のある音楽など箏や琵琶も常にかきならしたが、今ではそのようなことをする人もいないので、（斎院の御所に）参上する人もいない。時おり参上しても、そのようなことをする人もいないのを、（大斎院は）残念にお思いになっていたところ、今夜の月が明るいので、昔のことを自然とお思い出しになって、しみじみとした気持ちでいろいろ物思いをなさって、女房達とお話などしておやすみにならずにいらっしゃると、夜がたいそう更けてしまったので、おしゃべりしていた女房たちも大斎院の御前で、そのままうたた寝してしまった。院御自身は御目がさめていらっしゃったので、御箏を手すさびに弾いていらっしゃった時に、このように人々（殿上人たち）が参上したので、昔が思い出されてしみじみとしたお気持ちになられた。「この人々は、このような音

楽の素養がすこしはある」とお思いになったのであろうか、御箏・琵琶などをお出しになると、ことさらにではなくて、楽器の音の調子を合わせては、それぞれが一、二曲ずつ弾いて、明け方近くになったので、（殿上人たちは）宮中に帰参した。殿上の間で、しみじみと優雅で風流だったことを語ると、参上しない人は大変残念がった。ところで、その年の冬、御退下になって、室町という所にいらっしゃって、三井寺で尼におなりになった後は、一途にお勤めをなさり続けて、最期はたいそうお見事でご立派な様子でお亡くなりになった。

（人々は）「（入道の中将は）『現世では、すばらしく心ひかれるさまで、風流なくらしをしてお過ごしになったにつけても、来世はどうであろうか』と思い申し上げたが、（大斎院は）ひたすら御修行を気をゆるめることなくなさって、（御臨終の）御様子は、はっきりと極楽（に往生なさったのは）疑いなく、立派にお亡くなりになったので、『確かに極楽へお行きになったことであろう』と、入道の中将がお喜びになった」と語りなさった。

## 語釈・語法

**【九丁ウ】**

**●2女房は夜より物語して、月の明かゝりければ、「居明かさむ」と思ひて**

「居明かす」とは、起きたまま夜を明かすことである。『日本国語大辞典第二版』（小学館。以下、『日国』とする）「夜」「昨夜」の項に、平安時代の日付変更時刻は午前三時であったとする。この時は、「丑の刻ばかり」（『全注釈　其の二』七ウ7『純心人文研究　第24号』長崎純心大学・二〇一八年、以下、「全注釈　其の二」とする）なので日付が変わる直前である。「夜より」とあるのは、女房たちが前夜から話し込んでいて、既に明け方近くなっているからである。この日は雲林院念仏の果ての日（『全注釈　其の二』七ウ5）なので、満月の前後と思われる。女房たちは月の風情を愛で楽しみ、夜を明かそうとしていたのである。　→補説1

（六）

**●5いみじくあはれに思ひたる。気色ばかり**　「あはれ」とは、心の底から起こるしみじみとした感情や感動をいう。　→補説2

「思ひたる」については、『全書』『岩波文』は「思ひたるに」と「に」を入れる。『総索引』『全註解』『新大系』『全訳注』は、「に」を読まない。山内洋一郎氏の「草体仮名の織り成す美と実と――古本説話集四筆の交響」（『国語語彙史の研究　三十二』和泉書院・二〇一三年所収）による第一筆者（五丁オ～三三丁オ）の「気」を字母とする「け」を確認すると、本用例と似た筆跡が他に二カ所（二三オ3・三一オ2）ある。

①

本例

②

二三丁オ3「けふこゝのへ」

③

三一丁オ2「けれは」

「e國寶　国立博物館所蔵　国宝・重要文化財」（http://www.emuseum.jp/top?d_lang=ja による。）

③は、①②ほど起筆の部分が長くないが、①②に似ている。①②③ともに行頭から始まっているので、筆癖であろう。当該部分は、『総索引』が指摘するように「に」はなく「け」の起筆がやや上から始まっていると解すべきである。従って「おもひたる」は、連体形終止と考える。　→補説3

**●6気色ばかり奥の方に、碁石笥に碁石を入るゝ音す。**　「気色ばかり」は本用例のみ、ほんの少しだけの意。『日国』は『宇津保物語』（以下、『宇津保』とする）を初出とし、『源氏』『和泉式部日記』『栄花物語』（以下、『栄花』とする）

の用例を挙げている。『宇津保』の用例は、「気色ばかりのことの様を聞こえ給へば、」（『うつほ物語 全』「俊蔭」五三⑯・室城秀之・おうふう・一九九五年・傍線は筆者、以下同じ）をはじめ、全七例。『源氏』の用例は「日暮かゝるほとに、けしきばかりうちしぐれて」（新大系『源氏一』紅葉賀巻・P243）を入れて全十三例ある。いずれも「ほんの形だけ。ごくわずか。しるしばかり。」と解釈できる。なお、「気色」の用法にも「気色ばかり」と同じものがある。「けしき」の『日国』の第一義は「物の外面の様子、有様。また、外見から受ける感じ。」であり、これは形としてとらえられるものの状態を意味するものである。先に挙げた『宇津保』や『源氏』の用例はほとんどこれに該当する。「気色」は、本用例以外に八例（一三オ5・二五オ10・七三オ6・七四4・九六オ3・一一〇オ2・一一四ウ6・一三〇オ4　本集の欠丁を補った『信貴山縁起絵詞』に用例（一二三オ8）があるが、数に入れていない）ある。八例すべて「物の外面の様子、有様」と解釈できる。本用例の場合、「気色ばかり」は「奥の方に」にかかる。つまり、ほんの少しだけ奥の方（部屋）で、碁遊びをしているのである。『枕草子』にも、後宮でのある夜更けのエピソードがある。

夜いたく更けて、御前にも御殿籠り、人々皆寝ぬる後、外の方に、殿上人などにものなど言ふ。奥に、碁石の笥に入るる音、あまたたび聞ゆる、いと心にくし。

（増田繁夫校注・『枕草子』一九二「心にくきもの」P170・和泉古典叢書1・一九九一年）

これは、本集の本文と類似した場面である。この本文は対照説話の『今昔』には見られないし、同じエピソードを語る『無名草子』の本文にも見られない。本集の編著者が、大斎院の御所を後宮に準ずる雰囲気に演出して表現した結果と考えたい。

●**6碁石笥**（ごいしけ）　碁石を入れる容器。碁石笥は、中世以後「碁笥（ごけ・ごげ）」にかわったようである。「碁（囲碁）」は、『源氏』や『枕草子』などにもしばしば描かれ、『拾遺和歌集』には、村上天皇が帯を賭けて藤原伊尹と争ったとある。奈良朝に中国より渡来した遊戯で、天皇から下級貴族・僧侶に至るまで、男女を問わず盛んに好まれ、高尚な趣味とされた。ここでは、後宮社会の象徴として登場する。なお、『源氏』には、碁で遊ぶ場面はあるが「ごいし」「ごいしけ」「ごけ」いずれも見られない。『色葉字類抄』（以下、『字類抄』とする）には、「ごいし」のみ見られる。なお、『文明本節用集』には、「碁笥（ゴケ）」の項目がある。

『改訂新版　文明本節用集研究並びに索引』「碁」の項（勉誠出版・二〇〇六年）

（6632）

（中略）

（6634）

●**7御前**（おまへ）**にも**、「御前」は既出（『全注釈　其の一』P14「純心人文研究　第23号」長崎純心大学・二〇一七年。以下、「全注釈　其の一」とする）。本集には、本用例を含め二十二例ある。主体および対象の内訳を、以下に示す。

①貴人・主人・観音自身を指す場合（九ウ7・四六オ6・一〇〇オ9）

②貴人・仏・観音・大仏などの前、即ち場所を指す場合（五ウ10・八オ4・八オ10・一〇オ7・六七ウ3・七八ウ4・七九オ8・七九ウ2・八二ウ8・八二ウ10・八八ウ3・八九オ10・八九ウ1・九〇オ8・一一六ウ4・一二一ウ6・一二八オ8）

②の場所の「御前」は、上巻では、「大斎院」「道長」、下巻では、「仏」「観音」「大仏」などの前を指す用例が多い。「御前」の対象は限定されている。

●**7昔**（むかし）**おぼしめし出で**（いで）**ゝ**、「おぼしめし出づ」は、本用例のみ。高度の尊敬を表す「おぼしめす」は、本集には、本用例を含め十三例ある。主体は、大斎院（九オ4・九ウ7・一〇オ2）、道長（一三オ10）、観音（七九ウ4・一〇〇オ10・一〇〇ウ1）、帝釈（八六オ2・八七オ7）、仏（八九オ4）、醍醐天皇（一二〇ウ6・一二〇ウ9）である。「おぼしめす」の主体は、「御前」の対象と重なっている

（七）

ことがわかる。本集における「御前」と「おぼしめす」は敬意の対象を限定し、連動して使われているのである。

●**7あはれにおぼしけむかし**。「けむ」は過去推量の助動詞。「かし」は文末に使われ念を押し強調する助詞。終止形「けむ」三例（九ウ8・二二ウ7・四九オ5）は、本用例を含めて、すべて「けむかし」の形で出てくる。他の二十例は、疑問の副詞や係助詞を伴った連体形が十六例、その他の連体形が四例である。「已然形」はみえない。ここで、本集の編著者は、大斎院がしみじみと昔を思い出したことだろうよと推測し、総叙している。細序は、以下十三行。九丁ウ8「昔の殿上人は」以降、十丁オ10「あはれにおぼしめしける」まで大斎院が箏を弾いていたことなどが描かれる。「あはれにおぼしめしける」は、「あはれにおぼしけむかし」とほぼ同じ言い回しである。その後、殿上人たちが差し出された楽器を演奏したことなど風流な場面が展開する。詳しくは、「けむかしの表現性」（椎葉富美「教職課程センター紀要　第3号」長崎純心大学教職課程センター・二〇一九年三月　発行予定）を参照されたい。

●**8昔の殿上人は、常にまい[ゐ]りつゝをかしき遊びなど箏・琵琶も常に弾きけるを、**『今昔物語集』（以下、『今昔』とする）は「昔ノ殿上人ハ常ニ参テ可笑キ御遊ナドモ常ニ有ケレバ、御箏・御琵琶ナド常ニ弾ナドシツ、遊ケルニ、」。本集は文章表現上、『今昔』の「常ニ有ケレバ」にあたる部分がないため、「をかしき遊びなど」の係り方が不鮮明になり、文脈が乱れている。「つゝ」は、同じ動作の反復や継続を表す。ここでは反復。

●**9箏・琵琶も常に弾きけるを、**「こと」は、『岩波文』は平仮名を、『全書』『総索引』『全註解』『新大系』は「琴」の字を当てる。大斎院の父村上天皇は、とりわけ箏を好み、『文机談』（一二八三頃成立）には、「村上天皇の御門は御箏ばかり也、御比巴の御さたはありともうけ給はらず。」（岩佐美代子『文机談　全注釈』P63・笠間書院・二〇〇七年）とあり、大斎院の時代は「琴」ではなく「箏」全盛の時代である。（山田孝雄『源氏物語の音楽　復刻版』宝文館出版・一九六九年・初版一九三四年、豊永聡美『天皇の音楽史　古代・中世の帝王学』吉川弘文館・二〇一七年　等参照）また、『類聚名義抄』（以下、『名義抄』とする）（蓮成院本）に「箏コト」のよみがある。なお、二〇〇二年四月一日から施行された中学校学習指導要領に「和楽器については、三学年間を通じて一種類以上の楽器を用いること。」とある。この改定を受けて、中学校の教科書全二社（教育芸術社・教育出版）は、「箏」とルビを振り、「箏」と「琴」の違いを説明している。「箏」は既出（『全注釈　其の二』P17）。

『名義抄』（蓮成院本）
（下一・一九ウ3）

『鎮国守国神社蔵本　三寶類聚名義抄』（勉誠社・一九八六年）

●**10いまはさやうの事する人もなければ、まい[ゐ]る人もなし。**「さやうの事」とは、直前の「常にまいりつゝ～弾きける」を指す。殿上人がいつも訪れて管弦の遊びをしていた往時の大斎院の御所であるが、今では訪れる人もない。

**【十丁オ】**

●**1たま〳〵**　本集には本用例のみである。『今昔』は「適ニ」。『名義抄』『字類抄』（前田本二巻本、黒川本）ともに「適」を「タマ〳〵」とよませている。『訓点語辞典』（東京堂出版・二〇〇一年）によると、「タマタマ（偶）」は「奈良時代には仮名書きの例を見ない。平安時代では和文に例が少なく、主に漢文訓読文で用いられた。ほぼ同義の語に「たまさかに」があるが、これは和文、漢文訓読双方に多くの例が見られる。」とある。本集には、「たまさか」「たまさかに」はない。『名義抄』には「タマサカ」「タマサカニ」「タマタマ」が、『訓点語彙集成　第五巻』（築島裕・汲古書院・二〇〇八年）には「タマサ

（八）

カ」「タマタマ」が見える。

●**1さやうの事する人もなきを、くちをしくおぼしめされけるに、**　九丁ウ10

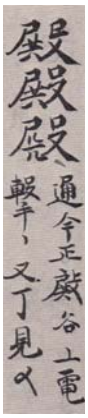
「いまはさやうの事する人もなければ、まいる人もなし。」を繰り返している。「さやうの事」とは、「をかしき遊び」を指す。文脈から考えて、「こと・びは」は「をかしき遊び」の例示という形で示される。『今昔』「如然ノ遊ビ」は「ことやびはの遊び」になる。「おぼしめされける」の主語は大斎院、「れ」は尊敬。ここから大斎院の視点にかわっている。「くちをし」は本用例の他に六例（一〇ウ7・三三ウ3・五三ウ9・八二ウ5・八五オ1・一〇三オ8）ある。

●**4よろづながめさせ給て、**「よろづ」「ながむ」は本用例が初出。「よろづ」は、いろいろの意で、本用例以外に一例（一二六ウ5）。他に「よろづの」十九例（一三ウ6・一四ウ8・三二ウ3・六二ウ5・六七ウ10・七七オ3・九六ウ7・一一六ウ5・一一九ウ4・一二五ウ3・一三〇ウ9・一三一ウ5・一三一ウ7・一三二オ10・一三五オ10・一三六オ5・一三六ウ5・一三七オ10・一三七ウ3）。「よろづに」三例（一〇九オ5・一一九オ9・一二五オ3）。「よろづは」一例（一一三ウ4）。「よろづも」一例（一一二ウ6）。「ながむ」は、ぼんやりと見やりながら物思いにふける意で、本用例の他に七例（一七ウ5・一八オ10・二〇ウ7・三四オ4・三九オ1・四九ウ6・五八ウ5）。「ながめゐる」一例（二七オ6）。

●**5御とのごもらざりけるに、**「御とのごもる」は「寝」の尊敬語。本用例の他に一例（七三オ4）。「御とのごもりいる」一例（九三ウ5）。いずれも「御とのごもる」と記す。『名義抄』（観智院本）に「御殿」を「オホトノ」とよみがあるので、「御とのごもる」は「おほとのごもる」とよむ。『総索引』は「発音も変わっているものと見たい。今「おん」を採る。」とする。『全註解』『全訳注』は「普通『大殿ごもる』と書く。」と指摘する。「御」字について詳しくは、「上代における『御』字の使用状況について」（椎葉富美・川浪玲子「人間文化研究　第十七号」長崎純心大学大学院・二〇一九年二月　発行予定）を参照されたい。

『名義抄』（観智院本）（「殿」の項）

（僧中三十四オ1）



（中略）

（僧中三十四オ2）

（天理図書館善本叢書32・八木書店・一九七六年）

●**6物語しつる人〳〵も、御前にやがてうたゝねに寝にけり。**「人〳〵」とは「女房たち」。『今昔』では「物語申ス人共モ」。「申ス」により、「人共」の話し相手が大斎院であることがはっきりする。本用例は大斎院の前（場所）をさす。『日国』の説明によると「うたゝね」は、思わず知らずうとうと眠ること。中古では、多く恋の物思いのためにするものとされ、『日国』の初出は、『古今和歌集』である。本用例と似たような表現として、「君をのみおもひねにねし夢なれば我心からみつるなりけり」（大系『古今集』巻十二、恋二、608みつね・P222）がある。管見によれば、「うたゝね」はすべて名詞形。動詞をとる場合「うたゝねをす」という形である（『源氏』常夏巻に例あり）。『今昔』は、「ウタ、寝ニケリ」。この本文については、「寝ニ」脱か。（P574）と全集『今昔2』に注記がある。

●**8御箏を手すさみに**　「手すさみ」は、退屈をまぎらわす手わざ、本集には本用例のみ。「てすさび」に同じ。

●**9昔おぼえてなむ、あはれにおぼしめしける。**「なむ」が入ることで、一方的に説明する文章ではなく、読者に同意を得ながら穏やかに語る口調を持った文になる（山口仲美『平安文学の文体の研究』「第三章　平中の文体と成立事情」P449・明治書院・一九八四年　参照）。なお、『今昔』の「昔メキテ」の場合は、「めく」が名詞に付いて動詞をつくり、それに似た様子を示すことから、「昔に似た様子で」となる。これはこの場面を客観的にとらえたものであるが、本集の「昔おぼえて」は大斎院の心情に添ったとらえかたになっている。

（九）

（一〇）

●**10「この人〳〵は、かやうのわざすこしす」と**　「かやうのわざ」は、「管弦の素養」を指す。昔の殿上人は管弦の素養があり、ここでは大斎院がすでに箏を弾いていることを背景にしている。

【十丁ウ】

●**1きこしめしたるにやあらん、**　お思いになったのであろうか。『日国』は「きこしめす」を「お思いになる」と解釈する場合の例として、『源氏』真木柱巻の「うちにもなめく心あるさまにきこしめし人〳〵もおぼすところあらむ」（新大系 三 P132・髭黒大将の心内文）の用例を挙げる。　→ 補説4

●**2わざとにはなくて、調め合はせつゝ、**　「わざと」は、「ことさらにではなくて、無造作に、とりたててというわけではなくて」の意。本集では本用例のみ。「調め合はす」は、楽器の音の調子を合わせること。「調べ合はす」に同じ。「調め合はす」は、管見の限りでは本集以外には用例がない。「調む」は、『日国』の初出を見ると、『宇津保』（970～999頃成立）、「調ぶ」の初出は『漢書楊雄伝天暦二年点』（948年）となっている。動詞語尾のb音とm音のゆれがみられる。なお、「調ぶ（む）」系の語を『源氏物語大成　普及版』（中央公論社・一九八四年）で確認した。「調ぶ」十七例「調べ合はす」一例「調べととのふ」一例「調べはつ」一例「掻い調ぶ」二例、計二十二例ある。「調む」は、宿木巻「打なけきてすこししらへ給ふ」（一七六七10・底本：大島本）の「しらへ給ふ」の異同として、池田本（伝二条為明筆）に「しらめ給」のみが見られる。その他管見の限りでは、『宇津保』一例（新編 3 ・三〇五14）、『夜の寝覚』一例（新編・二一〇12）、『梁塵秘抄』一例（新編二九三4、名詞「調め」は、二七〇3に二例見られる）、『平家物語』一例（大系上・三三九9）、『春の深山路』（新編・三六六10）、『太平記』二例（新編 1 四八15・ 3 三〇五6）に見られる。「つゝ」は反復。

●**3もの一二つばかりづゝ弾きて、**　「もの」は、本集には一八五例ある。その内訳は、生物（人物・鬼など）は、「ものども」を含め五十六例。「もの」は「人」に対して、立場や地位の低い人物に用いるといわれるが、人物を指す三十七例中、宇多院を除く三十六例は身分の低い人物である。無生物（実体のあるもの・抽象的なもの）は、一二九例。実体のあるものは一一五例、抽象的なものは十四例である。本用例の「もの」は、無生物・抽象的なもので楽曲を指す。「ばかり」と「づつ」の接続は、本集では本用例のみ。殿上人それぞれが箏、琵琶などを一、二曲ずつ弾いたことを指す。助詞を重ねることによって、状況を正確に表現しようとしている。「またいまやうのつや〳〵などいふをぞむつばかりづゝ、わたうすらかにてきせたる」（大系『栄花下』巻第十六もとのしづく・P51）等の用例がある。

●**4夜、明け方になりぬれば、内裏へ帰まいりぬ。**　『今昔』は「夜モ明ケ方ニ成レバ」とする。斎院御所での風流な一夜を過ごした殿上人は、夜が明けようとするころ宮中に帰った。　→ 補説1

●**5殿上にて**　「殿上」は本用例のみ。『字類抄』前田本（二巻本・三巻本）・黒川本に「テンシヤウ」。清涼殿の殿上の間のこと。公卿・殿上人が日常控えている場所。

●**5あはれにやさしくおもしろかりつるよし**　殿上人が斎院御所を訪れた夜のことを「あはれなり」「やさし」「おもしろし」と形容してまとめる。「あはれなり」は、既出（『全注釈　其の二』八オ6）。「やさし」とは、細やかな心遣いやたしなみの深さが感じられるさま。「やさし」の用例は、本用例を含めて四例。対象は「人」二例（二〇オ5・二三オ7）「事」二例（十ウ5・四九オ2）。「おもしろし」は、風流であること。『名義抄』図書寮本には「風流オモシロシ遊」、蓮成院本「風流ヲモシロシ」とある（観智院本には「風オモシロシ」とあるが、『五本対照　類聚名義抄和訓集成㈠アーカ』（草川昇編・汲古書院・二〇〇〇年）に「風流の誤」と指摘がある）。「おもしろし」の用例は、本用例の他に三例（一一ウ1・一三オ9・二四オ10）、対象はすべて「花」である。ここでは、まず斎院御所の全体の雰囲気を「あはれに」とする。次に、遣水が静かに流れ薫物の香りが漂う細やか

な心遣い（八オ８「遣水」～九オ１「調められて」）を「やさし」とする。「おもしろし」は、『古典基礎語辞典』（大野晋編・角川学芸出版・二〇一一年　以下、『基礎語』とする）によれば、「中古に入ると、特に音楽や遊宴についていう例が増え、何かに興味を抱き、知的好奇心をそそられるときにも使われるようになる。」とあるが、ここでは斎院御所で大斎院が箏を弾き、殿上人が演奏している場面（十オ７「わが御目は」～十ウ４「弾きて」）を指す。　→補説2

●**7その年の冬をりさせ給て**、殿上人と「をかしき遊び」をされたその年の冬。「おる」は、斎院を退くこと。本用例の他に七例（九六オ４・九八オ８・一〇四オ10・一二四オ１・一三四ウ１・一三四ウ５・一三四ウ８）ある。本集では複合語も含めて、すべて「を」で統一している。大斎院が退下されたのは、一〇三二（長元四）年のことであった。

●**8室町なる所**　上東門院彰子の邸第の一つに「室町第」があるが、所在等は未詳である（『平安時代史事典』参照）。「なり」は、指定の助動詞である。春日和男は、「『顔回ナルモノ』のごときトイフに相当するナルは近世の漢文訓読がもたらした特例」とする。さらに、注意すべきこととして、本集の本用例を引いて、地名による固有名詞をナルで承接した形はトイフと置き換えられる可能性を持つと説明する。（『存在詞に関する研究』P525～542・風間書房・一九六八年　参照）

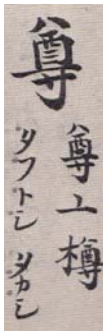
●**8三井寺**　滋賀県大津市園城寺町にある天台寺門宗の総本山。園城寺の別称。　→補説5

●**10御をこなひをせさせ給つゝ**、「おこなひ（ふ）」は本用例の他二十例（『信貴山縁起絵詞』で補った詞章は除く）。国の政を行う意の一例（五七オ４）以外は、すべて仏道修行をすることを意味している。「おこなひ（ふ）」が八例（一〇四オ５・一一六ウ７・一一六ウ８・一一七オ１・一一八オ３・一一九オ７・一二三オ１・一二九ウ５）、「をこなひ（ふ）」が十三例（一〇ウ10・一一オ４・五七オ４・六八ウ２・七六ウ８・八四オ10・八四ウ２・一一六ウ５・一一六ウ９・一一九ウ１・一二三ウ３・一三六オ５・一三七ウ７）。「お」と「を」が混用されている。

●**10終はりいみじくめでたく尊くてなむ**、「終はり」は、本用例と七六丁オ８の二例のみ。いづれも臨終の意。「いみじくめでたく尊くてなむ」は、「いみじくめでたくてなむ」と「いみしく尊くてなむ」をまとめた形。抽象的な表現であるが、具体的には『全書』の注にあるように、「臨終がみだれず、立派」（P89）ということであろう。「尊し」は、本集では、十六例（一一オ１・二一ウ５・五五ウ１・六八ウ２・七一ウ１・七四オ３・七四ウ３・七四ウ５・一〇四オ５・一一六オ３・一一九オ１・一一九オ７・一一九ウ３・一一九ウ７・一二〇ウ９・一二八オ８）ある。すべて「たうとし」で、「たふとし」はなし。また、「たうとがる」五例（五五ウ２・六七ウ２・一二〇ウ８・一三五オ２・一三五オ９）、「たうとさ」一例（一二八ウ７）、「たうとぶ」一例（一三三ウ６）と、統一的に表記されている。当時は「タウトシ」「タフトシ」が併用されていた。

『字類抄』（黒川本）
（中三ウ６）

『名義抄』（観智院本）
（法下七十三ウ５）




（『色葉字類抄研究並びに総合索引黒川本・影印本』風間書房・一九六四年）

**【十一丁オ】**

●**1失せさせ給にける**。「失す」は、死ぬの意。　→補説6

●**1『この世は、めでたく心にくゝ、優にて過ぎさせ給へるに、後の世いかゝ**」「この世（現世）」と「後の世（来世）」は対応している。「過ぎさせ給へるに、」の「に」は、諸注「確定条件の順接」に解釈している。『全書』では「（斎院親王としてまことに華やかな風雅を追求する罪深い御生活だったから）、後世安樂は果して如何であらうか」、『全訳注』では「この現世では風流で奥床しく、優雅

（一一）

にお過ごしなさったので、死後での報いはどうであろうか。」など。しかし、『今昔』は「現世ニ微妙ク可咲シクシテ過サセ給ヒニシカバ、後生ハ罪深クヤ御シマサムズラム」と、現世と後世との関係を明示している。それに対し、本集では「いかゝ」と疑問を投げかけるにとどめる。よって、ここは「確定条件の順接」ではなく、「先行事態を表わす」（「……につけても」）という用法で解釈したい。なお、「めでたく心にくゝ、優にて過ぎさせ給へる」の具体例としては、本話の五丁オ9～七丁オ3に描かれている逸話などがある。

●**3ひたぶるに御行ひたゆみなくせさせ給ひて、**「ひたぶるに」は、本用例の他に一例（一八ウ6）、いずれも他の事は意に介さず、ある一つの事に心が向かっているさま。「たゆみなく」は、既出（「全注釈　其の二」P9）。ここでは、「ひたぶるに」とともに用いることで、大斎院が仏道修行を一心不乱に行っている様子を表している。

●**4御有様、あらはに極楽疑ひなく、めでたくて失せさせ給ひしかば、**『今昔』には、この部分なし。「あらはに」は「疑ひなく」を修飾している。「極楽」の用例は、本用例と次行の二例、いずれも漢字表記。「極楽寺」の用例は四例（目録表題六〇オ5・七二オ4・七二ウ4・七三ウ4）、目録表題以外は仮名表記である。

「極楽」（梵語：sukhāvatī）は、阿弥陀仏の浄土の名。大乗仏教になって多くの仏菩薩が考えだされるようになったとき、それぞれの仏菩薩がそれぞれの浄土をもつという思想が現れた。『阿弥陀経』によると、阿弥陀の浄土は西方、十万億の仏土を過ぎたところにある。一切の苦患を離れ諸事安楽に満ちているので、「極楽」と名づけられる。中国・日本では阿弥陀仏信仰が高まり、「極楽浄土」という語も広く流布するに至った。（『岩波　仏教辞典　第二版』岩波書店・二〇〇二年、『改訂新版　世界大百科事典』「極楽」の項・伊藤唯真担当・平凡社・二〇一四年　参照）平安時代、摂関体制が安定期に入る十世紀末には、諸大寺の仏事が貴族社会の年中行事化するとともに、浄土教では源信が現われて、王朝貴族の嗜好にも合致した観想念仏と諸行往生を説いた。平安時代末期十一世紀頃、律令体制の動揺から生じた社会秩序の混乱に、末法思想による末世の到来という精神的不安が重なって、人々は現世を穢土と観ずるようになり、来世に安らぎを求めるようになっていった。死者の追善ではなく、自身が極楽に往生できることを願ったのである。（『国史大辞典』速水侑担当・吉川弘文館・一九七九～一九九七年、前掲書『改訂新版　世界大百科事典』　参照）

源信の『往生要集』（九八五年成立）の巻中・大文第六「別時念仏」第二「臨終の行儀」には、次のように記される（石田瑞麿校注『源信』P206・日本思想大系・岩波書店・一九七〇年）。

> 祇洹の西北の角、日光の没する処に無常院を為れり。もし病者あらば安置して中に在く。（略）その堂の中に、一の立像を置けり。金薄にてこれに塗り、面を西方に向けたり。その像の右手は挙げ、左手の中には、一の五臚の幡の、脚は垂れて地に曳けるを繋ぐ。当に病者を安んぜんとして、像の後に在き、左手に幡の脚を執り、仏に従ひて仏の浄刹に往く意を作さしむべし。瞻病の者は、香を焼き華を散らして病者を荘厳す。（以下略）

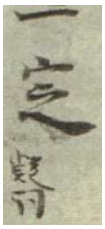
藤原道長が、極楽浄土を模して法成寺阿弥陀堂を建立し、阿弥陀仏の御手から我が手に五色の糸を引いて、北枕に寝て、最後まで念仏を唱えながら、六十二歳の生涯を閉じた（大系『栄花下』巻第三十「つるのはやし」P326・327の記事による）のは有名だが、平安時代中期から鎌倉時代にかけて極楽往生を願望する多くの人々は、「臨終の行儀」の教示に従って死を迎えたという。

大斎院は、誰の目にも明らかに極楽往生疑いなく、立派にお亡くなりになったのである。

●**6『一定極楽へ参らせ給ぬらん』**「一定」は、『字類抄』（二巻本）によみが付されている。また、『韻鏡新釈』（福永静哉・あそか書林・一九五五年）には、「外転第三十五開、舌音、定母径韻、濁、四等（ien）」とある。「一定」とは、確かに、きっと。本集では本用例のみ。『古語大鑑』（築島裕編・東京大学出版会・

二〇一一年 以下、『大鏡』とする）の補説によると、「副詞的用法は、十一世紀の古記録に散見されるようになり、十二世紀以後、説話や軍記などに広く使用されるようになった。副詞用法の意味領域は、当初推量・命令・意志などの文中で用いる広いものであったが、次第に推量表現と共に用いて判断の確度を表すものに限定されて行った。尚、「一定」の副詞的用法は、多く会話文や書状や消息などに出現することから、口語的性格の強いものであったと言う。」とある。本用例も、入道中将を主語とする心中言の引用文にある。本用例は、「一定」という副詞が、「参らせ給ぬらむ」にかかり、現在目の前で起こっている事実を確信的に推量しているのである。似たような例として、「一定うたれなんずと」（『平家物語』九 小宰相身投）、「一定僻事出できなんと思ひ」（『曽我物語』五）、「一定御所はここへ出でさせおはしましなむ」（『とはずがたり』二）等がある。

『字類抄』（二巻本）（「伊 畳字」の項）



『字類抄』（三巻本）（巻上12ウ）

**●7入道の中将よろこび給（たまひ）し**」「入道の中将」は、大斎院の甥にあたる源成信をさす（今野達「今昔物語集雑考㈠」都留文科大学国語国文学会編『国文学論考』創刊号・一九六五年三月）。源経頼著『左経記』（笹川種郎編・史料通覧・日本史籍保存会・一九一五年）、長元八（一〇三五）年六月条には、次のようにある。

十五日丁卯　天晴、午後参御堂、例講例時供養法了、入夜参先斎院、御悩危急云々、没後事令注置給之由有仰、入道中将被候、可然之事一向中将被申契云々、　（以下、略）

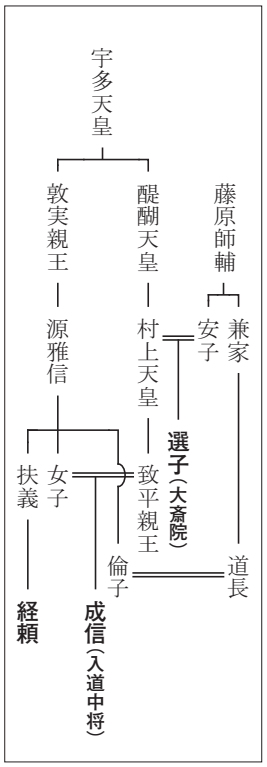
廿二日甲戌　天晴、去夕終宵降雨、　（中略）　先斎院申剋卒去給云々、

廿四日丙子　天晴、早旦参先斎院、謁入道中将、昨日依重日不参之由、幷他雑事小聞（等カ）了、帰家、

廿五日丁丑　天晴、及晩景参先斎院、戌剋出自北門、　（中略）　亥剋許到蓮台廟、　（中略）　先去葬所一許町備葬礼、　（中略）　次入道中将以下祇候、迎七人秉燭、分立鳥居左右、　（中略）　御骨光清朝臣持之、入道中将相共持向、三井寺、可奉置可立御堂之処云々、葬所作法、外垣引調布、鳥居懸手作、内垣鳥居引懸生絹、又火屋上覆同絹、事了件材木絹布等施給蓮台廟聖云々、

廿八日庚辰　天晴、以康朝臣来云、室町殿（先斎院御在所）加賀前司限四千石可給留之由、申定了、即其直散用中大僧正、大略所定如此、令申事由可改定者、薨後善事方、千三百余石、御卌九日間僧供女房等雑用三百余石、三井寺御堂作料千石、給料千石、残二百九十余石者、相示大底不悪、因之可被分充者、

六月十五日、成信（入道中将）は、危篤の床にある大斎院から後事を託された。二十二日、大斎院卒去。二十四日、経頼は成信に会い、亡き後の雑事について聞く。二十五日、葬儀にあたって、遺骨を持った光清朝臣と共に、三井寺の霊廟に奉安する。二十八日、葬儀の散用（支出）が記されるが、その中に大僧正（永円：成信と同一人物とする説がある。『日本人名大辞典』講談社・二〇〇一年 参照）の名が見られる。なお、『左経記』の作者源経頼は源成信のいとこである。（次頁、系図参照）　↓**補説5**




●7語り給（たまひ）し。

「語り給し」は、127行にも及ぶ、長大な「大斎院事」（第一）の末尾の語句である。本来の説話構文であれば、冒頭の「今は昔」と呼応して、いわゆる説話の語り口を形成するべきところである。この点に関しては、説話本文の途中に「人申伝へたり」（五オ8）とあり、変則的に、この部分と呼応していると考えるべきであることは、先に述べた。（「全注釈　其の一」P9　参照）

説話構文については、春日和男の卓論『存在詞に関する研究』（風間書房・一九六八年　第三編第二章五「今昔」考―説話の時制と文体―・六「今昔考」補説―「昔」と「今は昔」―）に依拠している。すなわち、『今昔物語集』に顕著な「今昔」と語り出し、説話の末尾を原則、「トナム語リ伝ヘタルトヤ」と結ぶ語り口を指して説話構文とする。この冒頭語と末尾とに挟まれた説話本体は、おおむね「ケリ体」で語られ、伝達の主体的場面の時間と説話本体の素材的時間との二重構造をなしていると、とらえられる。

本集全七十話に、このとらえ方を適用して分析した結果は、先に「『古本説話集』研究上の諸問題（四）―「大和物語」との類似性―」（『人間文化研究　第十四号』長崎純心大学大学院人間文化研究科・二〇一六年）として発表した。参照されたい。

この分析結果によると、第一話は、本集全七十話の中で、唯一、説話構文の語り口を保持していると考えられる例である。冒頭「今は昔」は、「全注釈



其の一」で述べたように、文中の一節「人申伝へたり」と呼応する特別な形ではあるが、説話全体の末尾の「語り給し」とも呼応していると考えられる。

本話の構成は、本稿 補説1（P15）に示したとおり、①～⑤の五つの部分から成り立ち、①は導入部で大斎院の人物の紹介、⑤は結末部で大斎院の最期という、起・結を持ち、それに挟まれた②③④の三つの部分は、大斎院の現世における風流・優雅な生活を語る三つの逸話である。

まず冒頭①の人物紹介の中で、斎院という立場にもかかわらず、阿弥陀仏・法華経も信仰したことを述べる部分の末尾を「人申伝へたり」と結び、さらに長大な説話全体の末尾、大斎院の仏教信仰が生半可なものではなく、その見事な最期を親しく見聞した人物の語りとして「『～入道の中将よろこび給し』と、語り給し」（十一オ7）と結ぶ。

この末尾は、入道の中将、すなわち大斎院の甥である三井寺の僧成信が、記録類（『左経記』等）によれば、晩年の大斎院を親しく世話し、後事を託されて葬送にも立ち会ったという事を踏まえ、成信の見聞を周辺の人物が語ったという形で述べているのである。成信の思いや言葉を伝え得る人物は、当然ながら大斎院及び成信周辺の高貴な人々であり、その事実が説話末尾の語句としては異例ともいえる「語り給し」という敬語使用になったものと考える。本話に関しては（特にその大斎院の最期に関しては）、伝聞を重ねて「語リ伝ヘタル」ものではなく、「語り給し」なのである。「失せさせ給ける」（十一オ1）と記した後の一文は、過去の助動詞「き」を多用している。この説話全体の末尾も、本稿 補説3（P20）に述べたとおり、複雑な多くの事柄を一文で述べた文・末尾の詠嘆の連体形終止である。

本話は、「今は昔　―　説話本体　―　語り給し」という説話構文（春日和男のいわゆるABC型）をやや変形ながら保持しているといえる。

## 補説１　九丁ウ２　時間の推移について

本話「大齋院事」は、次の五つの部分からなっている。

①最初～五丁ウ１「なをあさましく」（其の一：11行）
②五丁ウ１「さて」～六丁オ７「申させたまひける」（其の一：17行）
③六丁オ７「後一条院」～七丁オ３「しるしなるらん」（其の二：17行）
④七丁オ４「めでたく」～十丁ウ７「くちをしがりけり」（其の二・三：74行）
⑤十丁ウ７「さて」～最後（其の三：11行）

※括弧内の其の一・其の二は二〇一七年・二〇一八年に発表した「全注釈」を指す。なお、その下の数字は総行数である。

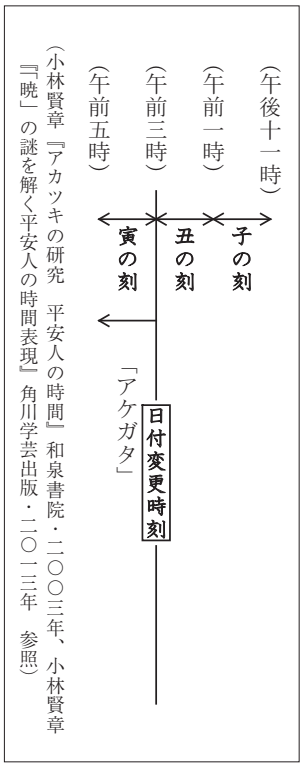
①大齋院の来歴を述べ、仏教を信心する逸話を紹介する。
②御禊の前駆をした幼い宇治殿（藤原頼通）に、大齋院がその場で臨機応変に禄を授けた対応を、藤原道長が褒める。
③賀茂祭の日、大齋院は、道長の抱いている後一条院・後朱雀院を御覧になったことを、扇の褄を差し出すことで示す。大齋院の心遣いに道長は感心申し上げる。
④大齋院は老年になり、斎院御所を訪れる人もなくなった。雲林院の不断念仏最終日、殿上人四、五人が斎院御所を訪れた。箏の音がするなど趣深い御様子であり、優雅で風流な一夜を過ごした。
⑤大齋院は斎院を退下した。三井寺で尼になったあと、一途にお勤めをなさり、立派な最期を迎えた。

④部分の時間の推移を、月の様子を参考に考えてみたい。

九月十日ほどの雲林院の不断念仏の果ての夜、殿上人四、五人が斎院御所を訪れた。以下、本話の記述に従って整理する。

・七丁ウ５「月のえもいはず明かき」時、殿上人が雲林院に出かける。
・七丁ウ７「丑の刻ばかりに」に、雲林院から出た。
・八丁オ１「夜のふけにた」る時、斎院御所の東門に入る。
・八丁オ６「月の光に照らされて」、御前の前栽の露はきらめきわたっていた。
・八丁ウ７「（大斎院が）月御覧ず」かと、殿上人は思う。
・九丁ウ３「月の明かゝりければ」、女房は「居明かさむ」と思っていた。
・十丁オ３「今宵の月の明かければ」、大斎院は昔を思い出しなさっていた。
・十丁ウ４「（箏・琵琶などを弾いて）夜、明け方になりぬれば」、殿上人は内裏へ帰った。

時刻がはっきりと書かれているのは、「丑の刻」（現在の午前一時から三時）のみである。夜ふけに斎院御所に入った殿上人は、「明け方」に帰る。日付変更時刻は、現在は午前零時であるが、平安時代は午前三時である。この時間を過ぎると、「明け方」になる。（次表参照）




（小林賢章『アカツキの研究　平安人の時間』和泉書院・二〇〇三年、小林賢章『「暁」の謎を解く平安人の時間表現』角川学芸出版・二〇一三年　参照）

（一五）

ところで、「不断念仏」は、『日国』には、「あるきまった日時に、あるいは昼夜間断なく念仏を唱えること。常行三昧に基づき、比叡山におこったもの。古くは七日と定め、時に九〇日間にわたった例もあるが、ほぼ三日にわたるのが恒例。」とある。三日から七日間程度とすれば、本文に「雲林院不断の念佛は九月十日のほどなれば」（〈全注釈　其の二〉七ウ4）とあるので、この時の雲林院の「果ての夜」は九月十二日以降だと考えられる。月の明るさや出ている時間帯を考えると、九月十二日から十八日の可能性がある。ちなみに、京都での二〇一八年の旧暦九月十二日から十八日を国立天文台暦計算室（https://www.rao.ac.jp/）のデータで調べてみると、次のようになる。この逸話の九月と多少変わるかもしれないが、大きな違いはないと考える。

| 旧暦 | 新暦 | 月名 | 月の出 | 月の入り |
|---|---|---|---|---|
| 9／12 | 10／20 | | 15時10分 | 1時26分（当日） |
| 9／13 | 10／21 | 十三夜月 | 15時43分 | 2時22分（当日） |
| 9／14 | 10／22 | 小望月 | 16時14分 | 3時19分（翌日） |
| 9／15 | 10／23 | 十五夜月 | 16時46分 | 4時17分（翌日） |
| 9／16 | 10／24 | 十六夜月 | 17時18分 | 5時17分（翌日） |
| 9／17 | 10／25 | 立待月 | 17時53分 | 6時18分（翌日） |
| 9／18 | 10／26 | 居待月 | 18時31分 | 7時21分（翌日） |

※「月の入り」の（　）内は、平安時代の日付変更時刻を基準にしている。

一．9／12・13・14の月の様子

殿上人が斎院の東門に入って来たのは、「丑の刻」を過ぎた頃である。月の入りが一時二十六分・二時二十二分・三時十九分では、箏・琵琶を楽しんでいる頃に月が沈んでしまうことになる。殿上人が「明け方」に帰った時は真っ暗である。

なお、旧暦九月十三日は、現在も「十三夜月」「後の月」として愛でられており、延喜九（九〇九）年に用例がある。

清涼殿のみなみのつまに、みかはみづながれいでたり、その前栽に松浦沙あり、延喜九年九月十三日に賀せしめたまふ、題に月にのりてささらみづをもてあそぶ、詩歌こころにまかす

一〇　ももしきのおほみやながらやそしまをみるここちするあきのよのつき

（「躬恒集」『新編国歌大観　第三集　私家集編』OD版二〇一二年・角川学芸出版）

二．9／15・16の月の様子

「不断念仏」が七日で果てたと考えると、十六夜月である。暦の上では十六日であっても、月は満月の場合もある。満月の次の日であっても十分に明るい。月の出は、十五日が十六時四十六分、十六日が十七時十八分なので、雲林院に出かけたのは「月のえもいはず明かき」時であった。月の入りは四時十七分・五時十七分、両日とも午前三時を過ぎ、「明け方」になってもまだ月は空にある。殿上人は明るい月のもとで内裏に帰ることができる。女房が「居明かさむ」ことも可能である。

三．9／17・18の月の様子

立待月や居待月でもこの逸話の時間的展開は可能であるが、月は次第に欠けていき、「月のえもいはず明かき」とは言えなくなってくる。

以上の検討から、殿上人が大斎院を訪ねたのは、九月十五日か十六日だと推測される。「雲林院不断の念佛は九月十日のほどなれば」とあり、果ての日が十六日にあたる蓋然性は高く、この日が適切と考えられる。

「丑の刻」過ぎに雲林院を出た殿上人たちは、大斎院御所で、それぞれ一、二曲ずつ箏・琵琶などを弾いた後、日付の変わった「明け方」に宮中に帰って

いったのである。

ところで、十丁ウ4「夜、明け方になりぬれば、内裏へ帰まいりぬ」の本文であるが、参照テキストには、以下のようになっている。（振り仮名に付されている記号類は、参照テキストのまま。）

『岩波文』よあけ方になりぬれば、うちへ帰まいりぬ。
『全　書』夜明けがたになりぬれば、内裏へ歸まゐりぬ。
『総索引』夜明け方になりぬれば、内裏へ歸（り）まい（ゐ）りぬ。
『全註解』夜明け方になりぬれば、内裏へ帰り、まゐりぬ。
『新大系』夜明け方になりぬれば、内裏へ帰（へり）まい（ゐ）りぬ。
『全訳註』夜明け方になりぬれば、内裏へ帰り、まゐりぬ。

表記の差はあるが、いずれのテキストも、「夜明け方」を一語と解していると考えられる。本稿では、「夜、明け方になりぬれば、内裏へ帰まいりぬ」と解した。その点に関して、以下、検討を加える。『日国』の記述は、次のとおり。（用例は、作品名のみをすべて挙げる）

よあけ-がた【夜明方】〔名〕
夜明け頃。夜が明けようとするころ。あけがた。
＊源氏物語〔1001～14頃〕絵合、＊古本説話集〔1130頃か〕一、
＊文明本節用集〔室町中〕、＊浮世草子・世間胸算用〔1692〕五・三

「よあけがた」の用例の分布状態を調査するため、『万葉集』から『新古今和歌集』まで十七作品の語句の用例数を調べた『日本古典対照分類語彙表』（宮島達夫、鈴木泰、石井久雄、安部清哉編・笠間書院・二〇一四年　以下、『語彙表』とする）を参照すると、「夜明け方」は、『源氏』のみに四例ある。「夜明け方」の『日国』の用例も、『源氏』の次は本集の当該用例である。

「夜明け方」は、夜明け頃の意であるから、『日国』で「夜明け」の初出を確認した。

よ-あけ【夜明】〔名〕
(1)夜が明けること。東の空が白んで、うす明るくなること。また、そのころ。あかつき。あけがた。
＊宇治拾遺物語〔1221頃〕二・三、＊文明本節用集〔室町中〕、＊書言字考節用集〔1717〕二、＊俳諧・俳諧新選〔1773〕二・夏、＊土〔1910〕〈長塚節〉二二
(2)新しい時代や希望のもてる状況の始まり。　＊兄の立場〔1926〕〈川崎長太郎〉三

「夜明け」(1)の意の初出は『宇治拾遺物語』（以下、『宇治』とする）である。『語彙表』で確認すると、『宇治』のみ一例である。

さらに、「明け方」について、『日国』の記述を見る。

あけ-がた【明方】〔名〕
夜が明けようとするころ。夜明け方。↔暮れ方。
＊日本書紀〔720〕天智九年四月（北野本訓）、宇津保物語〔970～999頃〕吹上下、
＊夜の寝覚〔1045～68頃〕一、＊日葡辞書〔1603～04〕＊星〔1896〕〈国木田独歩〉

「明け方」の初出は、『日本書紀』である。『語彙表』によると、後撰1・源氏9・更級1・新古今6・宇治1・平家3、六作品二十一例となっている。和歌・物語・日記・説話・軍記など、幅広いジャンルで用いられていた語であることが分かる。参考までに、「明け方」の対義語である「暮れ方」の初出は、『蜻蛉日記』である。『語彙表』には、蜻蛉1・源氏3・更級1・新古今1・宇治2・平家6、六作品十四例とある。ほぼ、「明け方」の用例と重なっている。

（一七）

本集の対象説話である『今昔』（新大系）の該当部分は、「夜モ明ケ方ニ成レバ、内ニ返リ参ヌ。」となっている。このことも考慮して、本集の十丁ウ4の本文は、「夜、明け方になりぬれば、内裏へ帰まいりぬ。」と解した。

## 補説2　「あはれ」系の語および形容語について

本集には、「あはれ」系の語が五十五例ある。「あはれ」（名詞）一例、「あはれ」（感動詞）五例、「あはれがる」（動詞）七例、「あはれなり」（形容動詞）三十一例、「あはれ」（形容動詞語幹）九例、「泣きあはれがる」（動詞）一例、「もののあはれなり」（形容動詞）一例である。このうち、本話には次の六例が見られる。

(ア)「つくろふ人もなきにや」と、あはれに見ゆ。（八オ6）

月の明るい夜、雲林院の不断念仏の最終日丑の刻ごろに、殿上人四、五人が斎院御所にこっそり入ると、御前の庭先の植え込みが勝手気ままに高く茂っている。「手入れをする人もいないのだろうか」としんみり思われる場面である。

(イ)かく思ひかけぬ人のまいりたれば、いみじくあはれに思ひたる。（九ウ5）

月が明るかったので、女房が「寝ないで夜を明かそう」と思って座っていたところに、殿上人が思いがけなく参上し、たいそう趣深く思った場面である。

(ウ)御前にも、昔おぼしめし出でゝ、あはれにおぼしけむかし。（九ウ7）

大斎院も賑やかだった昔を思い出しなさって、しみじみとした思いをされていたのであろうよと編著者が推測している場面である。

(エ)むかしおぼし出でられて、ものあはれによろづながめさせ給て、（一〇オ4）

月が明るいので、大斎院が賑やかだった昔のことを自然と思い出しなさって、しみじみとした気持ちでいろいろ物思いにふけっておられるという場面である。

(オ)かく人〳〵まいりたれば、昔おぼえてなむ、あはれにおぼしめしける。（一〇オ10）

殿上人が参上したので、大斎院は賑やかだった昔が思い出されてしみじみとしたお気持ちになられているという場面である。

(カ)殿上にて、あはれにやさしくおもしろかりつるよしを語れば、（一〇ウ5）

宮中に帰った殿上人は、斎院御所でのしみじみと優雅で風流だった経験を語ると、参上しない人は大変残念がったという場面である。

主語は(ア)・(カ)が殿上人、(イ)が女房、(ウ)・(エ)・(オ)が大斎院である。

「あはれ」の対象は、(ア)手入れが行き届かない現在の斎院御所、(イ)・(オ)昔の斎院御所を彷彿させる殿上人の訪問、(ウ)・(エ)賑やかだった昔の斎院御所、(カ)昔を彷彿させる現在の斎院御所での出来事である。

(ウ)は総叙部分、(エ)・(オ)は細叙部分に当たる。大斎院が昔のことを思い出し、「あはれ」と感じている様子が繰り返し述べてある。

(ア)～(ウ)の用例は、この場に居合わせた、殿上人・女房・大斎院を主語として「見ゆ」「思ふ」「おぼす」など、思惟を表す動詞を「あはれに」が修飾している。この場を共有した人々の感懐が、ひとしく「あはれなり」というものであったことを示している。(カ)は、この場面の総括として、殿上人が清涼殿で語る言葉として用いられている。つまり、この場面は「あはれなり」という語に象徴されていると思われる。

「あはれ」以外の、第一話での大斎院自身およびその周辺事物に対する形容語を、まとめたのが次表である。（ゴシック体※は、共通の形容語）

| | 語 | 用例数 | | |
|---|---|---|---|---|
| 大斎院自身に対して | めでたし※ | 5 | 13 | 23 |
| | 優なり | 2 | | |
| | をかし※ | 2 | | |
| | 心にくし※ | 2 | | |
| | あさまし※ | 1 | | |
| | らうらうし | 1 | | |
| 大斎院周辺事物に対して | めでたし※ | 2 | 10 | |
| | をかし※ | 2 | | |
| | 心にくし※ | 2 | | |
| | あさまし※ | 1 | | |
| | はづかし | 1 | | |
| | やさし | 1 | | |
| | おもしろし | 1 | | |

大齋院自身に対する形容語は六種類十三例・大齋院周辺事物に対する形容語は七種類十例、計二十三例である。両者に共通する形容語とその用例数は、「めでたし」七例・「をかし」四例・「心にくし」四例・「あさまし」二例、四語一七例である。この四語で、形容語の大半を占めていることが分かる。

この二十三例の形容語を、第一話における五つの部分（本稿P15）に分けて整理すると、次のようになる。

| | 大齋院自身に対する形容語 | 大齋院周辺事物に対する形容語 |
|---|---|---|
| ① | あさまし（五ウ1） | ナシ |
| ② | 優なり（五ウ4）・らう〳〵し（五ウ4）・をかし（六オ3） | めでたし（五ウ3） |
| ③ | めでたし（六ウ4） | ナシ |
| ④ | めでたし（七オ4）・心にくし（七オ4）・をかし（七オ4） | はづかし（七オ7）・心にくし2（七オ7・七ウ3）・あさまし（八ウ10）・をかし2（九オ3・九ウ9）・めでたし（九オ3）やさし（一〇ウ5）・おもしろし（一〇ウ5） |
| ⑤ | めでたし3（一〇ウ10・一一オ2・5）・心にくし（一一オ2）・優なり（一一オ2） | ナシ |

これらの形容語を二語・三語と重ねて、同一のものを修飾している箇所が六例ある。二語を重ねている例を、次に挙げる。

（1）御心様、御有様、大方優にらう〳〵しくをはしましたるぞかし。（五ウ4・対象：大齋院）

（2）「斎院ばかりのところはなし」と、世にはづかしく心にくき事に申しつゝ、まいりあひたりけるに、（七オ7・対象：斎院御所）

（3）「かくおかしく、めでたき御有様を、『人聞、けり』と思し召されん料に、知らればや」など言へば、（九オ3・対象：大齋院）

三語を重ねている例を次に挙げる。

（4）めでたく、心にくゝ、をかしくおはしませば、上達部・殿上人、絶えずまいりたまへば、（七オ4・対象：大齋院）

（5）殿上にて、あはれにやさしくおもしろかりつるよしを語れば、（一〇ウ5・対象：斎院御所）

（6）「『この世は、めでたく心にくゝ、優にて過ぎさせ給へるに、後の世いかゝ』と思ひまいらせしに、（一一オ1・対象：大齋院）

よい評価の語を重ねて、大齋院の美質をきめ細かく述べている。特に、「めでたし」「心にくし」「をかし」に注目すると、説話の展開の中で編著者がどのように修飾語を用いて、大齋院を描写しているが鮮明になる。先に示したように、本話を最初から末尾まで五つの部分からなると考えると、重複用例の（1）は①、（2）（3）（4）（5）は④、（6）は⑤の部分にあたる。

つまり、「心にくし」「めでたし」「をかし」の用い方は、大齋院の人柄を段階的に述べるのに、次のごとく重要な役割を果たしているものと考えられる。以下、五つの部分で見られる特徴をまとめる。

①大齋院の来歴紹介部分には、「めでたし」「心にくし」「をかし」いずれも見出せず、「あさまし」を用いる。

②御禊部分には、出だし車などに「めでたし」が一例用いられている。大齋院の心様・有様を述べる語として、「をかし」を用いるが、「優なり」「らう〳〵し」と周辺事物に対する形容には用いられていない語が、この場面だけに表れる。

（一九）

③賀茂祭見物部分には、「めでたし」が一例用いられている。
④雲林院の不断念仏最終日の部分は、往時の斎院御所の盛況をまず述べるが、そこに「めでたし」「心にくし」「をかし」が重ねて用いられている。さらに、その部分に「心にくし」が他に二例、計三例見られる。さらに、この世の斎院御所の風情を述べるところに「めでたし」が二例用いられる。
⑤大斎院最期の部分にはまず「めでたし」が用いられ、④の冒頭と同様に「めでたし」「心にくし」「優なり」と形容語が重ねて用いられる。臨終の場面でも「めでたし」が用いられる。「めでたし」は、⑤部分では三例と頻用されている。

形容語の種類と重なり方で、被修飾語に対する広がりが見え、第一話に対する編著者の表現意図が窺える。

ちなみに、ほぼ同文的な類話『今昔』と比較すると、その点が一層明確になる。本補説で扱った形容語は、大半が『今昔』と重なっているが、本集にはさらに重要な部分での追加が見られる。

すなわち、④部分の冒頭で「心にくし」二例・「はづかし」一例、④の末尾に「やさし」一例、最後の⑤部分に「心にくし」一例・「優なり」一例・「めでたし」一例が追加されている。「優なり」は、②部分にも用いられた語である。

また、④部分のクライマックス近くに、『今昔』「微妙（めでた）シ」・本集「あさまし」と違う形容語が用いられている箇所があるが、これは、『今昔』が客観的な描写であるところを、本集では登場人物の心情に沿った表現にするという文脈の差による。

一体に、本集においては、登場人物の心情に即した表現になっていて、臨場感が高められ、より一層、大斎院の人柄を讃美する筆の運びになっている。

（二〇）

## 補説3　九丁ウ5「あはれに思ひたる。」（連体形終止）について

語釈のところで述べたとおり、「思ひたる」の下に「に」を認めず、連体形終止ととる。連体形終止については、

・『日本文法学概論』（山田孝雄・宝文館・一九三六年）
・「連体形終止法の表現効果―今昔物語集・源氏物語を中心に―」（小池清治「国文学言語と文芸」9(5)・一九六七年）
・「仮名文における話線の断続と終止形・連体形の機能」（伊坂淳一『小松英雄博士退官記念日本語論集』三省堂・一九九三年　所収）
・『係り結びの研究』（大野晋・岩波書店・一九九三年）
・『日本語活用体系の変遷　増訂版』（坪井美樹・笠間書院・二〇〇一年）
・『活用と活用形の通時的研究』（山内洋一郎・清文堂出版・二〇〇三年）

等、多々論じられている。中世期の言語変遷の中で、連体形は次第に用法が拡大し、終止形の代替機能を持ち始めた。そして、遂に終止形に取って代わるようになって、近代語に至ったという経緯は、大方異論のないところである。

ここでは、本集の連体形終止について整理し、本用例を連体形終止とすることの妥当性を検討したい。手順は次のとおりである。

1. 本集の全七十話を対象に、文末が連体形になっている用例を抽出する。
2. 文末の判断は、『総索引』を中心に、他の注釈書類も参考にした。
3. 係り結びになっているもの、歌に直接するもの、引用の「と・とぞ・など」に直接するものは除外した。
4. 一般に、連体形終止が当然だと思われるもの（疑問の副詞に続くものなど）は除外した。

以上の調査の結果を、次の表にまとめた。

| | 文末 | 用例数 | | |
|---|---|---|---|---|
| 地の文 | たる | 3 | 19 | 25 |
| | ける | 13 | | |
| | る | 1 | | |
| | し | 1 | | |
| | なる | 1 | | |
| 歌 | ぬる | 1 | 1 | |
| 会話文 | たる | 1 | 4 | |
| | つる | 1 | | |
| | なる | 1 | | |
| | ほしき | 1 | | |
| 心 | らるる | 1 | 1 | |

この中で、和歌・会話文・心内文は、文章表現上、他の要素も考慮しなければならず、別途の考察が必要だと考えられる。今回は、当該本文と同種の地の文十九例を調査対象とする。

ところで、これら十九例は、すべて文末が助動詞であり、用言の連体形の例はない（ちなみに、和歌・会話文・心内文の六例もすべて文末が助動詞であるが、本補説ではその点については触れない）。助動詞は、それぞれの機能において、文章全体の締めくくりとしてのニュアンスを、文末に添加するものである。個々の助動詞の特性について検討する必要があるが、本補説では当該本文、すなわち「たる」の連体形終止の妥当性を検討するものであるから、まず文末「たる」の三例について検討する。

まず、当該用例をそのまま抜き出す。

【用例1】女房は夜より物語して、／月の明かゝりければ、／「居明かさむ」と思ひて居たるに、／かく思ひかけぬ人のまいりたれば、／いみじくあはれに思ひたる。（九ウ5）

一文が長く、一文の中に事柄が五件（／で区切っている部分）入っている。構成要素の多い長い一文の締めくくりとして、結論部分を詠嘆を込めて述べていると判断できる。残りの二例を検討する。

【用例2】「この木のもとに烏あり。あしこに雀あり。食はれじ」と撰りて、／ひとはなれたる山中の、／木の下に、／鳥、けだ物もなく、／食ふつべき物もなきに／食ひいたる。（八五ウ6）

留志長者が、誰もいないところで飲食をしたいと、場所を探しあぐねた末にやっと人気もなく動物もいない場所を見つけて座り、食べ始めている場面である。どうにか場所を見つけ、思う存分食べられるという留志長者の安堵感が連体形終止に表れている。

次の用例は、話末の人物の解説にあたる部分である。類話『世継物語』（続群書類従）とほとんど同文である。『世継物語』では、該当部分を「申たる侍従は」と続けていることを考えても、【用例1】【用例2】に準ずる例と考えることができる。

【用例3】御堂のなかひめ君、三條院の御ときの后皇太后宮と申たるが女房也。／山との宣旨とも申けり。／よにいみじき色好みは本院の侍従、御荒の宣旨と申たる。／侍従は、はるかのむかしの平仲が世の人、この御あれの宣旨は、中ごろの人、されば、昔今の人を一手に具して、申たる也。（一二オ1）

御荒の宣旨と呼ばれる女房について説明しているが、混乱した文脈の中で、女房の仕えた主、別名、その人物の印象、生きた時代など様々な事項を説明するための何文かが続いている。あるいは、『世継物語』の本文のように、体言「侍従」に続く連体修飾格と読むべきかもしれない。同一の女房名の混乱の中で生じている、連体形終止である。

（二一）

以上、文末「たる」の三例を検討してきたが、いずれも一文の中に、長い時間の行動や内容を入れ、最後に詠嘆や強調を込めて、連体形で終わっていると判断できる。本補説の検討は、ここでとどめるが、本用例を連体終止として解釈することは、妥当であると考える。

なお、他の助動詞の連体形で終わる文、また、和歌・会話文・心内文の用例も、逐一検討し報告すべきであろう。しかし、紙幅の都合上、「ける」の事例の一例を示すにとどめ、残りは割愛する。

【用例4】いまはむかし、／ゐ中人の徳ありけるがひとりむすめ、／いみじく愛しくしけるち、は、、亡くなりて、／たよりなく、ずちなくなりて、多かりし使ひ人も、みな行き散りて、／心ぼそくわびしくて過ぐるほどに、／廿にもあまりて、／やう〳〵盛り過ぎ、／懸想する人もあまたあれど、／「かゝるあやしの物は、たゞうち見て捨てんをば、いかゞせん」など思ひて過ぐるまゝに、／をやの作りまいらせたる観音のをはします御前にまいりて、／「たすけさせ給へ」と申つゝ、そればかりを頼むことにはしける。（七九オ10）

非常に長い文である。一人娘の父母が亡くなって、まわりの人も頼れない状況下、最後に観音だけを頼みにしているという娘の気持ちが「ける」という連体形終止に強く表れている。

「ける」で終わる十三例は、ほぼ同様の事例であり、他の助動詞も同様に解することができる。

## 補説4　十丁ウ1「きこしめす」の解釈について

「きこしめす」を『日国』で引くと、以下の意味が記される。

きこしめす【聞召】〔他サ四〕

（「きく（聞）」の尊敬語「きこす」に「見る」の尊敬語から転じた「めす」が付いて一語となったもの）

〔一〕(1)「聞く」の尊敬語。お聞きあそばす。お聞きになる。＊初出『古事記』

(2)（(1)から転じて）「思う」「考える」の尊敬語。お思いになる。お考えあそばす。＊初出『源氏』真木柱

(3)「聞いて承知する」意の尊敬語。お聞き入れになる。また、お受け入れになる。受納なさる。＊初出『延喜式』

(4)（天皇が臣下から政事をお聞きになるところから）「治める」「支配する」の尊敬語。お治めになる。＊初出『古事記』

(5)「飲食する」の尊敬語。召しあがる。＊初出『古事記』

―以下、略―

本話のこの場面は、大斎院が文化サロンとして賑やかだった往時をしみじみと思い出して女房たちと語り、照り輝く月の光のもとで、女房たちも今夜は寝ないで夜を明かそうと思っていた時のことである。大斎院は、御箏を手なぐさみに弾いていらっしゃった。「きこしめす」を「お聞きになる」と解釈すると、女房が大斎院に「殿上人は音楽の素養がある」と申しあげたことになる。大斎院の御前にいる女房たちは、語り疲れうたた寝をしているのであるから、いきなり殿上人の音楽の素養云々と申しあげるのは、やや違和感がある。ここは、大斎院自身が来訪した殿上人は素養があると思い、女房たちに御箏・琵琶を準備させると解釈した方がしっくりすると考えられる。

とはいえ、「お思いになる」という解釈は、管見の限りでは、記載されている辞書類は、『日国』『基礎語』『大鑑』の三冊のみである。

『基礎語』の記述は以下のとおり。「お思いになる」の用例として『源氏』『栄花』の用例を挙げている。

②「聞く」の尊敬語。
㋐お聞きになる。耳にお入れになる。
㋑聞き知ってお感じになる。お思いになる。お考えになる。
＊〈源氏・桐壺〉　＊〈栄花一二〉

『大鑑』の記述は以下のとおり。用例を『古事記』以下『平家物語』まで八例挙げているが、すべて、「お聞きになる」の用例である。

①（「聞く」、又は「思う」の尊敬語）お聞きになる。お思いになる。お考えになる。

『日国』『基礎語』『大鑑』に挙げている用例以外にも、当然、「お思いになる」意をあらわす用例はあると考えられるが、本補説では、『源氏』（本文は新大系）と『栄花』（本文は大系）の「きこしめす」に限定して、調査した。両作品ともに、「お聞きになる」「お思いになる」「お食べになる」意を示す三つの用法でしか用いられていない。用例数が少ないので、比率を出すことに大きな意味は見出だせないが、比較のため、それぞれの作品の用例数に占める割合を％で示している。また、全用例を地の文・会話文・心内文・消息文に分けて表示した。和歌には用いられていない。結果は、次の表のとおりである。

| | | 源氏 | 栄花 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| お聞きになる | 地の文 | 64 | 112 | 176 |
| | 会話文 | 36 | 2 | 38 |
| | 心内文 | 9 | 1 | 10 |
| | 消息文 | 4 | 0 | 4 |
| | 小計 | 113 (83.7%) | 115 (66.9%) | 228 (74.3%) |
| お食べになる | 地の文 | 9 | 45 | 54 |
| | 会話文 | 6 | 7 | 13 |
| | 小計 | 15 (11.1%) | 52 (30.2%) | 67 (21.8%) |
| お思いになる | 地の文 | 4 | 5 | 9 |
| | 会話文 | 1 | 0 | 1 |
| | 心内文 | 2 | 0 | 2 |
| | 小計 | 7 (5.2%) | 5 (2.9%) | 12 (3.9%) |
| 計 | | 135 | 172 | 307 |

『源氏』は、全一三五例中、「お聞きになる」意・一一三例、「お食べになる」意・十五例。「お思いになる」意は七例、全体の5.2％にあたる。『栄花』は、全一七二例中、「お聞きになる」意・一一五例、「お食べになる」意・五十二例。「お思いになる」意は五例、全体の2.9％にあたる。『源氏』『栄花』の「お思いになる」と解釈可能な用例十二例を、以下に挙げる。『源氏』は【用例1】から【用例7】、『栄花』は【用例8】から【用例12】である。

【用例1】弘徽殿には久しくうへの御つぼねにもまうのぼりたまはず、月のおもしろきに、よふくるまであそびをぞし給ふなる、いとすさまじう物しときこしめす。
（『源氏一』桐壺巻・P17L7・地の文・主体：桐壺帝　※『基礎語』の用例）

【用例2】「世中にありときこしめされむもいとはづかしければ、やがてうせ侍なんも、又この世ならぬつみとなり侍ぬべき事」などきこえ給も、むくつけきまでおぼしいれり。
（『源氏一』賢木巻・P363L3・光源氏から藤壺への会話文）

（二三）

（二四）

【用例3】人しれずものしとやおぼすらむ、―中略― うけばりたるおやざまにはきこしめされじと、院をつゝみきこえ給て、御とぶらひばかりとみせ給へり。

（『源氏二』絵合巻・P170L13・光源氏の心内文）

【用例4】かくて、御ぶくなどぬぎ給て、「月たゝば、猶まいり給はむことい みあるべし。十月ばかりに」とおぼしの給を、うちにも心もとなくきこしめし、

（『源氏三』藤袴巻・P98L5・地の文・主体：朱雀帝）

【用例5】このまいり給はむとありしこともたえきれて、さまたげきこえつるを、うちにもなめく心あるさまにきこしめし、人〳〵もおぼすところあらむ、（『源氏三』真木柱巻・P132L15・髭黒大将の心内文　※『日国』の用例）

【用例6】院の御こと、このたびこそとぢめなれと、みかど、春宮をはじめたてまつりて、心ぐるしくきこしめしつゝ、蔵人所、おさめどのゝから物どもおほくたてまつらせ給へり。

（『源氏三』若菜上巻・P225L3・地の文・主体：帝と春宮）

【用例7】ことさらに人にけしきもらさじとおぼしければ、よべのさかしがりしおい人のしわざなりけりと、ものしくなむきこしめしける。

（『源氏四』総角巻・P417L15・地の文・主体：匂宮）

【用例8】たゞいまはかぎりなくかしづきゝこえさせ給も事はりなり。大納言殿には、うらやましくきこしめすべし。

（『栄花上』巻第十二たまのむらぎく・P362L9・地の文・主体：頼通　※『基礎語』の用例）

【用例9】とのばらいみじう宮の御かたを心にくきものにかむじ給。経は経蔵におさめさせ給つ。女ばうみやにまいりて、けふのことゞもけいすれば、かひありてきこしめす。

（『栄花下』巻第十六もとのしづく・P46L16・地の文・主体：妍子）

【用例10】かくて阿弥陀堂には、けふらんぼんかうせさせ給へば、いみじくたうとくあはれにきこしめす。御堂にみなまいらせ給つゝ、ほとけをも御堂をもみたてまつらせ給に、いみじくたうとくめでたくおぼしめさる。

（『栄花下』巻第十七おむがく・P78L1・地の文・主体：三后）

【用例11】皇太后宮の一品の宮の春宮にまいらせ給べしといふ事世にいできて、さるべき縁につきて、人〳〵「まいらん」など申さすれば、ほかはしらず、宮のうちにはたゞいまさる事なければ、「ものくるほしいかなる事にか」ときこしめしながら、（『栄花下』巻第二十八わかみづ・P282L10・地の文・主体：妍子）

【用例12】その御せうそくには、「―中略― たゞこの御事により、いまゝでいきて侍なり。かの日まで侍らんの心にてなん。あがきみ〳〵いそがせたまへ」とある御せうそくしきりなるを、宮の御まへゆゝしくあはれなる事にきこしめせど、

（『栄花下』巻第二十八わかみづ・P284L6・地の文・主体：妍子）

【用例1】は、桐壺更衣死去の知らせが届いたにもかかわらず、弘徽殿では管弦の遊びをしている場面である。伝聞推定の「なり」が用いられており、弘徽殿女御の催す管弦の音が、桐壺帝の耳に届き「いとすさまじう物し」とお思いになる。『基礎語』の用例である。

【用例2】は、光源氏から藤壺への言葉である。亡き人のような藤壺の様子に、藤壺の心中を慮るものの、嫌われた自分がまだ「世中にあり」と不愉快に思われるのも恥ずかしいと語る。

【用例3】は、前斎宮（秋好中宮）が冷泉帝に入内するにあたって、前斎宮に好意を寄せていた朱雀院を、光源氏が慮る場面である。光源氏は、自身が「うけばりたるおやざま（前斎宮の表立った親代わり）」というふうには、朱雀院からお思いいただかないようにしようと考える。

【用例4】は、光源氏の養女として六条院に引き取られていた玉鬘が、尚侍

として参内することが決まった場面である。冷泉帝は、玉鬘の出仕を「心もとなく」お思いになっている。

【用例5】は、髭黒大将が、容易に打ち解けない玉鬘を尚侍として出仕させようと考える場面である。髭黒大将は、自分と結婚したことで玉鬘の入内を妨げたことを、冷泉帝は「なめく心あるさま」にお思いになり、光源氏や内大臣も不満にお思いであろうと考える。『日国』の用例である。

【用例6】は、出家を決意した朱雀院が、女三宮の裳着を執り行う場面である。朱雀帝の催す御行事は、このたびが最後になると、冷泉帝や春宮をはじめとして、みな「心ぐるしく」お思いになる。

【用例7】は、匂宮から中君に後朝の文が届く場面である。匂宮は目立たないようにとの思惑であったのに、中君方は作法どおりに使者に禄を下賜したことに、「ものし」とお思いになる。

【用例8】は、藤原教通に女児が生まれた場面である。まだ子どもに恵まれない兄の大納言（頼通）は、「うらやましく」お思いになる。『基礎語』の用例である。

【用例9】は、皇太后宮妍子御所の女房たちが書写した、法華経供養が阿弥陀堂において善美を尽くして行われた場面である。女房たちが、今日の盛儀のほどを啓上すると、宮（妍子）は「かひありて」とお思いになる。

【用例10】は、盂蘭盆講が行われている阿弥陀堂を、三后（彰子・妍子・威子）が御覧になっている場面である。後に、同じ形容を使ってその後に「思しめさる」と結んでいることから、三后は、「いみじくたうとくあはれに」お思いなっていると解釈できる。同語の反復を避けるために、同意の「きこしめす」が用いられたのであろう。

【用例11】皇太后宮妍子の一品宮（禎子内親王）が春宮に入内するということで、縁故を求めた人々が宮付きの女房にと申し出がある場面である。宮邸では、「ものくるほしいかなる事にか」とお思いになる。

【用例12】は、病に苦しむ道長が宮の御前（妍子）にあてた消息文である。道長は、一品の宮の春宮参入の支度を急ぐようにという文を頻繁に届けるので、宮の御前は、「ゆゝしくあはれなる事」とお思いになる。

以上の十二例は、もちろん「お聞きになる」と考えることも不可能ではない。しかし、【用例3】【用例4】【用例5】【用例8】は、いずれも場面の中では、直接的な聴覚刺激によって思惟がもたらされたとは考えにくい。「お思いになる」「お考えになる」と考えるのがより適切な用例である。

また、【用例1】いとすさまじう物し、【用例2】世中にあり、【用例4】心もとなく、【用例5】なめく心あるさま、【用例6】心ぐるしく、【用例7】ものしく、【用例8】うらやましく、【用例9】かひあり、【用例10】いみじくたうとくあはれに、【用例11】ものくるほしいかなる事にか、【用例12】ゆゝしくあはれなる事、と思惟の内容を形容する語句が置かれていることから、これらの用例は「お思いになる」と解した方が妥当であろう。

人は、何かを聞いたら必ず何かを思う。『日国』の〔一〕(2)に「(1)から転じて」とあり、『大鑑』の【補説】には「上代末から以後、最高段階の敬語として、和文を中心に広く用いられた。その語義の範囲も、語釈に示したように多岐に及んだ。」とある。「きこしめす」の、「お思いになる」意への広がりは、語義変遷の当然の帰結と思われる。

（二五）

## 補説5　十丁ウ8　三井寺出家のこと

「大斎院」の退下・出家・卒去については、説話と史実の違いを、諸氏が種々に論じておられる（『全書』『全註解』『新大系』『全訳注』など）。その違いを確認するため、斎院退下から卒去までの大斎院の動向を簡単に比較して次の表にまとめた。史実は『左経記』『日本紀略』等、説話は本集・『今昔』等が挙げられる。史実は源経頼著『左経記』を上段に、説話は本集を下段に示した。なお、史実の『左経記』と『日本紀略』の内容はほぼ同じであり、説話も本集と『今昔』の内容はほぼ同じである。本集の本文は、省略せずにそのまま示す。

| 年月日 | 左経記 | 本集 |
|---|---|---|
| 一〇三一（長元四）九月二十二日 | 亥剋以大僧正御車、秘蔵可令渡室町給云々、 | さて、その年の冬、をりさせ給て、室町なる所におはしまして、 |
| 九月二十三日 | （経頼）参室町院、 | 三井寺にて尼にならせ給ける後は、ひとへに御をこなひをせさせ給つゝ、 |
| 九月二十八日 | 今夜斎院御出家、大僧正奉授戒云々、 | |
| 十月十一日 | 参賀茂、（中略）件幣被謝申斎院被退出之由云々、 | |
| 閏十月二日 | 入夜参前斎院、覚超僧都参入、奉授十戒、及深夜退出、 | 終はりいみじくめでたく尊くてなむ、失せさせ給にける。 |
| 一〇三五（長元八）六月二十二日 | 先斎院申剋卒去給云々、 | |
| 六月二十五日 | 御骨光清朝臣持之、入道中将相共持向、三井寺、可奉置可立御堂之処云々、 | |
| 六月二十八日 | 室町殿（先斎院御在所） | |

この表により、大斎院（選子）の動向をまとめると、次のようになる。

| | |
|---|---|
| 左経記 | 斎院→室町→出家→卒去→三井寺 |
| 本集 | 斎院→室町→三井寺→出家→卒去 |

史実では、選子は老病により、秘密裡に室町に退下し、六日めに出家、その後、病悩のなかで勤行に励んだと想われる。そして、あしかけ五年間居所にした室町で亡くなる。三井寺に葬られるが、生前、三井寺に入ることはなかった。

一方、説話では、室町→三井寺→出家となるが、出家の時期を史実と同じ頃と考えると、室町はほんの数日間の通過点で、即、三井寺での出家ということになる。

また、出家の時期は、『左経記』では九月二十八日で晩秋である。本集では、「その年の冬」（一〇ウ7）となっているが、これは『左経記』長元四（一〇三一）年十月十一日条の「参賀茂、（中略）件幣被謝申斎院被退出之由云々」、『日本紀略』長元四（一〇三一）年十月十一日条の「奉幣賀茂社。被申斎院退出之由」を念頭においたものかもしれない。

「大斎院の三井寺出家の事は、正史に徴し得ず、左経記以下の記事とも相違するが、一概に事実無根の誤謬とも決しがたい」とし、その理由として「村上源氏流と三井寺の関係」が深いこと、「大斎院の薨後、納骨堂が三井寺に作られ、その回向供養を甥の三井寺の永円大僧正が管理した（左経記）こと」などを挙げ、「大斎院の三井寺出家説」は「たとえ誤伝であっても、いわれある誤伝であるように感じられる。」という考え方もある。（今野達『新注今昔物語集選』P192・補注二六・大修館書店・一九六九年）

本集の「尼にならせ給にける後は、ひとへに御をこなひをせさせ給つゝ」（一〇ウ9）という記述は、選子出家後の仏道修行の長さを想わせる。出家はしたものの卒去まで室町で過ごす場合と、退下後、すぐに出家した三井寺で過ごす場合とを比べた時、選子にとっては、後者が理想の姿であったであろう。その意味で本集に語られる選子の終焉のさまは、本集の編著者が史実の基本（斎院・

室町・出家・三井寺など）を踏まえた上で、選子が真に望んだであろう最期を語ったものと考える。

## 補説6 十一丁オ1「失す」について

『日国』によると、「失す」の意は次のとおりである。

一 存在していたものがなくなる。
(1)事物や人がその場から見えなくなる。無い状態になる。ほろびる。消える。
＊初出『日本書紀』
(2)人がこの世からいなくなる。死ぬ。 ＊初出『日本書紀』

二 ―略―

語誌
(1)古代には、「隠る」「なくなる」とともに「死ぬ」の忌み詞として用いられたが、「うす」は、これらのうちで、最も使用頻度が高い。また、「うす」は、尊敬語「給ふ」「させ給ふ」を伴うことが多いが、これは、「死ぬ」が直接的な表現であるため、目上に対して用いることが忌避され、その結果「うす」が、多く目上に対して用いられることと関わっていよう。 (2) ―略―

本集において、生あるものが他界する時に用いる語は、「失す」「死ぬ」「亡くなる」の三語であり、「死ぬ」を意味する「隠る」の用例は見られない。「なくなる」については、下巻五十四話「ちゝは、亡くなりて、」（七九オ1）の一例のみである。

本集における「失す」の用例は、上巻は「死ぬ」意十六例・「姿（物）が消える」意三例。下巻は「死ぬ」意五例・「姿（物）が消える」意八例である。直接的な「死ぬ」の用例は、二十例を見出す。「死ぬ」意で「失す」が使われた用例と直接的な表現である「死ぬ」の用例の対象者は、次表のとおりである。

| | 「失す」（「死ぬ」意）の対象者 | 「死ぬ」の対象者 | 計 |
|---|---|---|---|
| 上巻 | 大斎院2（一）・和泉式部1（七）・小式部1（七）・季縄少将1（一一）・伯の母の姉1（二〇）・長能1（二六）・宇多院1（二七）・融1（二七）・兵部の大輔1（二八）・御乳母のおとこ1（二八）・人1（三七）・貫之の子1（四一）・少将3（四六）【全十六例】 | 鹿1（六）【全一例】 | 21 |
| 下巻 | 牛仏1（五〇）・堀川太政大臣1（五二）・姫君2（六〇）・源信僧都1（七〇）【全五例】 | 修行者4・鹿1（五三）青さぶらひ2・馬6（五八）子1・親子1・父1（六〇）・鷹生1（六四）・牛2（七〇）【全十九例】 | 20 |

①算用数字は用例数、（ ）内の漢数字は説話番号である。
②「失す」の対象者の傍線は、尊敬語「給ふ」「させ給ふ」を伴う場合である。

「失す」（「死ぬ」意）の用例は、上巻十六例・下巻五例。「死ぬ」の用例は、一例を除く十九例がすべて下巻にある。

この表により、編著者の貴顕に対する意識がはっきりわかる。本集における「死ぬ」意の語は「失す」と「死ぬ」にほぼ限られ、傾向としては、「人間」については「失す」が、「動物」については「死ぬ」がそれぞれ用いられていることがわかる。

（付記）
以上で、「大齋院事」（第一）本文の注釈は終了するが、凡例で示したとおり、「類話」及び当該箇所に記載できなかった「参考文献」については、この後に付すことを予定している。また、本文中の記号・符号の問題、及び、本注釈における漢字の訓みの根拠についても、次稿で述べる予定である。

（二〇一八年十月一日 受理）